

又水害が心配の季節となった。コロナ禍の中で災害発生したらどう対応したらよいか、課題は多い中、市社協主催で防災講座が開かれた。一昨年の台風19号水害時には災害ボランティアセンターを開設するなど市社協は被災者支援の核を担っており、防災教育にも注力している。

コロナ禍で参集講座が難しくリモート形式となり、山辺からは3名がリモートに挑戦。若い方には何でもないが、高齢者にとっては理解し難い世界だけに、まずやり方をサポートする。

カメラ付きパソコン又はスマホに「ズーム」というアプリをインストールして、主催市社協からのメールでの「招待」を受けて登録セットする方式。参加者の顔も画面の端に示される。やってみたら意外とやさしく今後の応用が楽しみとなった。

3月20日10時スタート。講師は前全社協職員・全国災害ボランティアNWコンサルの園崎氏。何と浦安市の自宅からの講義。プ



ロジエクター映写の市社協の会場には10人位で密ならず。リモート参加も10人位が。テキストは事前に送付され、受け易く学び易いリモート講座であった。

講題は「災害に備えるために大切なこと」被災地の実際を知り自分の地域を考える。

内容についてポイントを箇条表記する。

- ・災害大国日本だが災害ごとに被災地の状況は異なる。一つとして同じ災害はない。被災地の風景から学び(コロナは多い)。
- ・被災地の中で起る「混乱」を学びとれ。
- ・地元の平時での対策は水害想定が主流だが、地震災害は長期の局面ごとの対応策が必要。
- ・災害規模が大なるほど行政の対応力に限界がある。地域共助が力ギとなる。
- ・災害ボランティア活動は実に多彩。



画面の園崎講師。リモート者も上段に表示

中止にめげず、少しでもつないでいく活動を

コロナ禍の中での活動がどうであったか前年を振り返ると、中止にした活動が多い。文化祭模擬店、地区外研修バスツアー、高齢者特別会食会、講演会、障がい者交流おひさまカフェ、ふれあいハイキング、福祉ボランティア育成活動など、当社協の主要活動の大部分が中止。

高齢者の巣ごもり状態の弊害が顕著なだけに、少しでもつながり活動を、と安全策を施した上で実施できたのが、独居老人給食サービス。購入品の配布で4回、半分の人数で作ったお弁当配布が2回。特に10ヶ月ぶりで作ったお弁当に「あ、あったかいのが来た」と喜ばれた、との報告が印象的だった。

子育てサロンも人気だった企画メニューをやめて、「場の提供」だけにしても、3回の開催にとどまった。

各町内の12のサロンは、感染不安から一度も開催できなかった所が4サロン、お菓子配布で顔合わせ安否確認など工夫して1回でも開催できた所が8サロンだった。



松本会長と表彰者。左 根岸克治氏 右 小林良子さん

高齢社会で最も大切な相互支え合いと地域ボランティア担い手が、コロナ禍で心が折れてゆく。立て直しがとても厳しい。

本年の功労者・顕彰表彰にお二人が

老人給食活動で長く頑張られた小林良子さんと地域環境美化に尽力された根岸克治さん。お二人にお話しを伺いました。

小林良子さん(堀込町)

「平成4年に登録以来、29年間の給食作りでした。お料理は若い頃から好きで色々勉強もしながら励んできましたが、好きな道で地域社会貢献できることは幸せでした。その上、数年前

には市長表彰(H28年)も頂けて本当に感謝です。施設入所している主人からも、「地域への恩返しが大それたよ」と言われているので、これからも自分のできる範囲で、地域との繋がりを保持して行きたいと思っています。」

根岸克治さん(堀込町)

「10年以上も前、退職していたこともあり、地域で草ぼうぼうの所が気になり、美化へ一念発起した。始めは横手橋西側を手掛けていたら他町内だと言われた。それで今の本庄病院近くの川岸に取組み、もう4年になる。まだイメージ実現に至らないが、長期計画で徐々に下流岸にも整備していくつもり。」

自分の家の前の草も取らない人がいるが、動機はざら見苦しいから。始めは色々言う人がいた。小判でも埋まってるのか?いくら金が出るんだ?と。気にしたら何もできない。でも、見る人は見てくれている。感謝と激励の言葉を掛けてくれる人が増えて行った。

住民は支えあわなくちゃ。自分勝手はだめだろう。ここへきて30年になるがこの町内はすばらしい人達が多い。これからのこの絆を大切にしていきたい。」

赤い羽根と歳末助け合い募金の「知らないうち」解説

外部支援をつまみ受け入れる。避難所の問題列挙(資料に)。

平時での心構え・留意点列挙。

特に平時での顔の見える関係作りが大切。

講話に直近の足利の山火事災害も出て、本城町内で住民避難支援に奔走した地区内代表も社協会場に参加しており、その体験と課題も披露された。

募金に協力していても、使用道や同様募金が二つあることなど意外と知らないことが多い。先般民生委員向けに解説書を作成したので、ポイントを紹介します。

共同募金の意義。行政は税金をもって公平な社会福祉の実現をめざす一方で、住民自らが主体的に社会福祉課題に取り組みことを補完的に求めている。その一つが共同募金だ。

「共同募金」とは「赤い羽根共同募金」のこと。

実施組織は「都道府県の募金会」で、市町村はその下部の支会。国はその連合体の位置付け。

「赤い羽根共同募金」は支会で

令和3年度 山辺地区社協 役員

会長	松本留男(自)
副会長	石川昭二(自) 本橋裕一(専)
	新井 明(民) 久保田英三(交)
	今泉備一(老) 三田忠良(協)
事務局長	樋口茂延(専)
常任理事	齋藤修一(協) 高瀬雅子(協)
	古山 高(自) 簗輪省三(自)
	齋藤美代(協) 新江義夫(協)
	柳沢 猛(専) 栗原 収(協)
	小林英一(協) 田中幸子(専)
	上岡恵子(民)
理事	麻生千明(自) 山本一八(自)
	坂本三郎(自) 堺本松枝(自)
	堀越輝夫(自) 堀越幹夫(自)
	山本順一(自) 波澤克博(自)
	島田恵造(自) 岡田十四夫(自)
	蛭田利栄(自) 石原利男(自)
	稲田克己(自) 田中榮太郎(自)
	金井 弘(自) 椎名松俊(自)
	小暮 保(自) 櫻井龍美(自)
	岡野綾子(民) 落合おる(民)
	阿久田操子(民) 須永ミチ子(民)
	尾崎雅治(民) 田部井久代(民)
	萩原恵美子(民) 富福百子(民)
	倉林順子(民) 飯田剛史(学)
	松葉みつ子(体) 須永利江(老)
	清水弘子(協) 橋本静江(協)
	金井幸子(協) 生澤きくえ(協)
	田島章廣(協) 宮沢秀喜(協)
	菅 弘武(協) 小堀蒼洋(協)
監事	樋口茂延 齋藤修一 高瀬雅子
事務局	齋藤美代 新江義夫 柳澤 猛
	栗原 収 小林英一 田中幸子
	田島章廣 宮澤秀喜

集め県の募金会に集約、配分。支会用途には約50%の配分。

「歳末助け合い募金」は赤い羽根共同募金とは区分して「支会」内で募金し全額運用される。しかし県・国レベルでは、「赤い羽根共同募金」の中の一つに含む扱い。(統計上・資料上)

その理由はよってきたる歴史にあり、官制募金(赤い羽根・国、県主体)と民自発募金(歳末助け合い、市町村主体)との違い。

目的も実施形態も近似している。国・県は、昭和34年に「歳末助け合い募金」は「赤い羽根共同募金」の中の二つに含める、とした。

支会(市)に配分後の「赤い羽根共同募金」と100%市レベルの「歳末助け合い募金」は共に市社協が管轄し、主要用途は同一(敬老会・地区社協事業・いきいきサロン、災害対策支援等)。

「歳末助け合い募金」の独自使途としては、困窮世帯等の個別支援金、独居高齢者特別友愛訪問・特別会食会、小口資金貸付があり、いずれも民生委員が関与する事業である。

金額レベルは年度変化はあるが、赤い羽根の市への配分は約650万、歳末助け合いは約1500万円の規模である。